
School!

にー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School!

【コード】

N9873I

【作者名】

にー

【あらすじ】

2xxx年。主人公、ジャン（杏）は世界で唯一の教育機関、「School」に入る。

ソフトクリーム型の陽気な建物内では、学校という名を越え、ショッピングやエンターテイメント、最新の設備や勉強、世界各国の伝統イベントをかねそろえていた一つの都市だった！

そのSchoolでのメインイベントである、通称、「ひるやすみの鬼ごっこ」といわれる4ON1。

なんとジャンはひよんなことからこれに参加することになってしま

った！

Schoolでの目新しくて、穏やかな生活にジャンは次第に溶け込んでいくが、

戦渦は徐々にジャンに決断の時を迫る。

自分は何が秀でているのか、なにをすべきなのか、

そしてなにができないのか、

そしていつたい自分は誰が好きなのか、、、！？

だがその川には苔とか石とかさかなとかそういったものが全く見られない。

だからなのか、

そうではないからなのか、

手紙はその川の真ん中だけをなぞるようにゆっくりと進んでいく。

シラカバがまばらにたつ、この湿原の中を霧を晴らしていくようにゆっくりと。。。。

杏は目の前がまた白くなるのを感じた。

毛布だ。

ああ、また寝てしまったのか、。

ソファに寝転ぶとちょうど頭上にストーブの熱がこもってなんだかいつもぼんやりしてしまう。

祖母がかけてくれたのであろう、毛布を引き寄せながら、杏は思った。

次の瞬間、

今日の光景を胃から吐き出しそうになった、

のだが、、、

「こんばんは、佐井田杏さん。」

切れ長のの透き通った目一つ一つが、垂直に私の眼を捕らえる。

「わあああつつつ！」

と男の顔に直に唾を飛ばした。

「ぎゃああつつと叫ばれると思っていたのに、なかなか女の子なんですね。」

と男は内ポケットからハンカチを取り出しながら、嫌味ばく言った。

白いハンカチで顔を拭いた後、その顔は、スライド式の鏡のように男は変わっていた。

そこにはただ無表情な顔を顔に造った男がいた。

そして

「出発です。」

とだけ言った。

男が持つ赤いバックパックを見ながら、心臓が急降下していくがわかった。

そう、この毛布は祖母がかけてくれたものではなかったのだ。

同じ日はないと、どこかで聞いてはいた。

しかし、今日はいつも通り8時に家を出たはずだ。

祖母の作った熱いシチューを食べ、
その角まで手を振られながら見送られ、

一時間目の国語を受け、小テストを8点ノ10点の平均点そこそこ
でクリアし、

二時間目の数学の後、10分休みに宿題の課題のノート全員分を職
員室前の廊下まで運んだ。

いつもと違うのはそう、
そこで、呼び出しが入った。

「佐井田杏さん、校長室まで来てください」と。

一瞬、足がぐらついた。

前回、校長室に呼ばれたのは、そう、小学二年生の夏だ。

「佐井田さんのお父さんとおかあさんは国の研究のため、先ほど東
京へ出発しました。」と。

急な要請であるため、私にも告げずに。

こうやって間接的に。

それから8年、私は両親と一度も会っていない。

私はくじけそうな心臓をなんとか引き連れて、校長室へ向かった。

思った。

父のこと、母のこと、

そして祖母のこと。

三人がかわるがわる頭をまわった。

校長室の前で立ち止まることなく、そのままドアノブに手をかけた。境界をまたぐか、またがないか、視界に入るか、入らないかの時、

「受けました、おめでとう。」と声がきこえた。

見ると、校長が私に向かってベージュがかった文面を自分の前でぐいっとさげていた。

「な、な、なににですか？」

おもわずどもってしまった。

ほんとに何に受かったのか分からなかったからというのももちろんだが、

還暦に近いわが高の女性校長は落ち着いた青い目をひどく沈ませていたからだった。

わたしなにかした？

私は後ろ手でドアを閉めながら聞いた。

わけのわからない様子の私に、
校長はさらにわけのわからない単語を続けた。

「S C h o o l にはです。この世で唯一の学校に、です。」

次の瞬間だった。

校長室の窓から閃光が走った。

どっつおおおおおお。地面が唸る。景色がぶれる。身体が浮く。

外からの悲鳴と同時に校長が私の身体ごと視界をさえぎった。そして隅にあるたんすの扉の中に自分と一緒に私を仕舞いこんだ。扉が閉まると、先ほどの閃光のごとく、私たちは急降下していった。上を見上げると、扉の枠を鮮烈に縁取るように真っ赤な熱が漏れていた。

悲鳴はだんだんと遠ざかっていく。

校長は私に言った、

「これはエレベーターです。」と。

校長は、私にいった、

「君は、無事だから、」と。

「君はこの国から選ばれたから。」と。

そう。

短く言つと、そういうことが手紙には書かれていた。

2XXX年、私はこの地球ノ（せかい）に生まれた。
そして、この世界は平和ではなかった。

その世界は権力者たちが、兆単位の人間を抱えることができないと信じていた。

少数先鋭だけを望んだ。

そして彼らが作った世界で唯一の教育機関、School。

そして私は日本国の代表となった。

唯一の日本人として。

生まれてきたときと同じように、何億という命と引き換えに。

ふるさととひきかえに。

がっこうへ

私は家に戻っていた。

いつものまにか家に帰ってきていた。

このただっぴろい田舎の、なにもない、小高い丘の上の、一軒家に。

自然以外の何もない。何も変わっていない。

風が吹けば、林の木々がさざりと音を立てる。

ただ家は空っぽだった。

主人の帰りをずっと待つかのようにしんと静まり返っていた。

日が沈み、昇り、また沈み、昇り、を繰り返した。

ここにいれば、時が永遠に止まったまま、進むと思った。

それで、

それで、

いいと思った。

また同じように日が沈みかけたころ、一人の男がやってきた。

警備服を身にまとったその男は私に向かって言った。

「出発のお時間です。」

その右手に持つ白い封筒に携えて。

私に現実を届けに。

「行かなくてはいけません。」

私は赤のバックパックを追っていった。こんな暗やみなのに、あの赤はやけに目立つ。

あの中には私の荷物が入っている。特別なものやセンチメンタルなものもはいつていない。

ただ男が「つめていく」といった。

たぶんぬいぐるみとかそこらとしか入っていない。と思う。でも詳しくは分からない。

「要らない」といったのだが、それでも男はもくもくと詰めた。

でも、今私の手元にある現金とPDAよりも重要になるのかもしれない。

私にはよく分からない。

もはやこれから何が必要なものなのか、要らないのか、私にはわからない。

男についていくと、突然視界がひらけた。

港だ。

港にはここらの小高い山を上回るほどの大きな船が。

ここにはなかなかこないが、これほど大きい船がこんな小さな港に着いたのは港ノ（ここ）では初めてなのではないだろうか。

あれだ、有名なあの船だ。と思った。

真っ白に赤が一本映えているおおきな機体。

大きな飾りのように化しているやけにおおきなマスト。

ただ、この船は夜の海に浮かぶ発泡スチロールの残骸のように、音を感じさせない。

と、見とれているうちに赤いバックパックが甲板のほうへ上つていくのが見える。

私もあわててついていく。

男は甲板に入る前のところで私を待っているようだった。

船上の船員が口を開く前に、男が発した。

「遅い。」

私は憎まれ口をたたこうとしたが、やめた。

男の顔は私よりも動揺しているようだったからだ。

「他にも荷物があるのか。」

と遅れたのはそのせいだといわんばかりに私の周りをみてから、そのまま腕を引いていく。

船員は最敬礼をして、私と男を見送っていた。

男は私を奥にある部屋に案内した。

豪華なシャンデリアでもありそんな部屋のうちで、ここは八畳ほどで小さな豆電球のある古い個室だ。

真ん中には筒のようなストーブに火がともされていてほの温かい。

「荷物は置いておく。」

といすの上におきながら、男が言った。

「ここに食事をおいておく。何かあったら来なさい。」と紙を渡した。

それから船員の女性に鍵をかけて置くように言って、出て行ってし

まった。

ひとり、部屋をみまわした私は、バックパックを開いた。

やはりぬいぐるみしか入っていない。

大きなくま。赤いリボンがついている。これは祖母からクリスマスにもらったものだ。

かめさん。これは友達から。

ストラップのくま。これははじめてのUFOキャッチャーで。

白ウサギさん。これは、。

誰からかは判らなかった。

他のものに気をとられてしまったから。

祖母と私と、父と母。

粹の中で笑っている私は

ピースもできずに、人差し指と親指でちょきをカメラに向けている。
まだ幼い。

ほんとにまだ小さい。

視界がぼやけた。

私は泣いた。

ひとしきり泣いただろうか、私はまた甲板に出ていた。
今は誰もいない、ようだ。しかしまだ真っ暗のままだ。

もはや私の町の港は見えない。

目を凝らしても、見えない。
ただ海が続いている。ように見える。
海と空の境目さえわからない。

でも分かる。

私は大きなマストに寄りかかっていること。
そしてこの船にいれば、迷子にはならないということ。

部屋に戻ると、出入り口付近の靴箱の上には教科書と学生証が置かれていた。

そう、私は行かなければならないのだ。

汽笛が大きくなり、私は伸びをする。
すっかりとまた眠り込んでしまった。
毛布を抱えて引き寄せるところを、どんとどんとドアをたたく音がする。

「乗り換えの時間です。起きてください。」

「はいはい、おきてますよ。」

なんとなく憎まれ口をたたきながら、ドアを開く。
昨日の男であるはず。昨日夕メロを彼がたたいたのは気のせいだったのか。

制帽のつばを被っている彼からはいつもその表情は読み取れない。
けれど、その口元は穏やかだった。

「乗りかえってどういうことなの？」
たぶんそんなに年齢のたがわない彼にタメ口をたたき続ける。
「ここからは列車に乗り換えて学校まで向かっていたたくようにな
っております。小さな島々があるので、この船では乗り込めません
ので。とりあえず、甲板まで出て行かれてはいかがですか。」

詳しく説明してくれる彼について甲板へと出る。

「、、、つつ」

声を呑む。

ここは別世界だ。

ハワイがこんな感じなのだろうか。

白い雲を青い空。まさに夏の風。

だが、春の雲のようにぼんやりと漂う空気。

何もかもが違う。

小高い山や草原、林や森しかなかった私のいた冬とは。

いや、夏であっても違うと思うだろうが、そんなことはかんがえた
くない。

そして

見える、がつこうが。

Schoolだ。

ソフトクリームの形をした白い建物やら赤と黄色と緑と、、、と、
とにかく全色ある、いびつな建物。

どこかの古いシヨッピングモールのようにだ。

センスが悪い。

そこまでに一本の白い道が続く、そしてその道が続くのが、私たちがいる港の真横にある駅だ。
つまり、線路なのだろう。

「荷物はこちらでよろしいでしょうか。」
いつのまにか船員の女性が私の荷物を部屋から運び出してくれていた。

「、、ええ。はい。ありがとうございます。」
「列車まで運びます」という彼女の言葉に私はそのまま続けた。
もう部屋に戻る必要はない。

私はそのまま男と女性についていった。

列車は案外普通だった。そして空いていた。
10数両列はありそうなのに、乗客は一車両に2、3人座っているか否かだった。

なのに男は
ボックス席の、
しかもシルクハットをかぶった燕尾服の老人が座っている斜め前の席に私を座らせて、荷物を全て置き、どこかへ行ってしまった。

半分怒り、半分あきれで私は窓の外の景色を見やった。

「何だってこの席なのよ。」

、、、それにしても、この老人も、だ。
この燕尾服といい、シルクハットといい、
そして杏のもひとつ気になることといえば
何だってこの老人はわざわざ通路側の後ろ向きの席にすわっているのか。

もし一番早く乗っていたのなら、ボックス席のいま自分が座っている席を選んだらう。

というか、ボックス席はまず選ばない、か。

手持ち無沙汰に、手元にある教科書をあさる。

規定要綱とある一冊の本が目につく。

最近の紙はほとんどなくなり、PDAばかりなのに、こういっだけはなぜかPDA化されない。

杏はおもむろにこの学校の規定を開いたみせた。

第一章・退学事項

「一章から、退学についてなんて、、、。」おもわず発しそうになるが、かまわず目を伏せたまま、読み進める。

1. ここでは身分を明かしてはならない。明かした場合は、退学とする。
2. 無断で学校敷地外に出た場合、退学とする。
3. 規定、定義等に反した場合、退学とする。

「偽名だな、改名ではなく、」

一瞬自分は項目を口に出してしまったのかと思った。
燕尾服の男が私に話しかけている。

「、、、えっ、、、と。」

「一項目目だよ、書いてあるだろ、身分を明かすな、と。改名しろ

と小さくその下に書いてある。
全く改名なんて出来るわけない。」

ホントだ、改名を登校初日に各所属理事長宛てに提出しろ、と書いてある。ありんこみたいにちっさい字で。

「しかも改名は規定に定められた範囲の名前に限られている。まったくなんてこった。」

私は彼を見上げた。

彼は一体どうしてこんな事をたんと語っているのだろうか。
老人と思われた彼は、単に髪が白くなっているというだけで、40代前半といったところか。

「私たちには親が付けてくれた名前がある。それらは偽名というにふさわしい。」

男は優しいまなざしを私に向けている。

というか、優しそうな顔つきをしている。

相当な苦勞があつて、こんな白髪頭に、。。。

私は勝手に想像し、同情した。

「いやいや、私の国の髪色はみんなこんな風なんだよ。別に歳だからというわけじゃない。」

びっくりした。

もしかしてこの人は、

「考えが読めるの。」

思った事と彼が発した事がまったく同時だった。

私は面食らった。

「いや、今は同時だから、特殊なもんじゃないさ。君だって先は読める。」

私は彼を見据えたまま。

たぶん、頭の中は空白だったと思う。

「この能力を買われて、僕は国から選ばれた。」

えっ？能力？

能力、、、

があるから？

、、わたしは？

彼はつづけた。

「人は、だれしも何らかの能力がある。でもここでは時代に合った必要な能力が秀でていないとだめだという。

君もきつとある能力が秀でているんだろう。

でも時代に合ったものとは限らない。

君を否定するものがあるだろう。

でも、それがもつとも大切であると考える人が君を引き寄せて、今

君はここに来た。」

彼の目は沈んでいる。でもあの時の校長とはなにか違う、眼。

「だからこの地球ノ（せかい）で出会えるまで、君は君を大切にしておほしい。それまであきらめちゃだめだよ。」

きつとすぐそばにいるから。」

たぶんまだ空白だったのだろう。

彼はふにやつと笑ってこう言った。

「期待しているよ、はあ、なんだか眠いね、僕は一寝入りすること
にしよう、おやすみ。」

彼は言うだけ言って、どさつと背もたれに身を預ける。

「ええええつ」と驚いているうちに、もうすやすやと寝息を立てて
いる。

一連の状況に唾然として見ているわたしに別の声が聞こえた。

「寝ている間は考えは読めない、心配するな。」

「そうじゃなくて、」

とっさに声のする方に返した。

分かっている、私をここまで連れてきた男の声だ。

「どうしてここに座らせたのよ。」

「彼に君の考えを読んでもらうためだ。」

悪げもなしに彼は即答した。

きつと睨みつける私に、「たいしたことは君はどうせ考えては
いないだろう」と続ける。

「なら、彼を連れてくる必要なんてないじゃない。」

「、そうだな、」と彼は言う。

「でも、彼のさっき言った言葉は君にとって必要になるかもしれない。
」

「彼の言った事」、そう、能力とかそういういったもの。私の能力って。

私は、
「必要とされている。」

今度は思っていた事と真逆のことを言われて、男を見る。

「だから今君はここにいる。」

彼も言うだけ言って、わたしにカップスープを渡して別の車両へ去っていく。

「冷える前に早く食べなさいと。
なかはクリームスープであった。」

私は食べた。

ハワイの陽気さを持った空と春のさくらのような空気に囲まれた小さな島々を見ながら、
そのなかでも一番あったかいクリームスープを口に運んで。

着いた。

がっこうの感想は先程と同じ。
悪趣味だ。

色のせいだとおもつ。
デザインはそう、悪くない。

ガラスかなにかで出来た巨大な、長いトンネルが、到着した駅から学校まで続いている。

学校の入口付近に居る、小指大の人間でさえ把握できそうな透明なトンネル。

ステンドグラスまでとはいわなくても、十分立派なものだ。

いつもと違い、私の後に男が降りてきた。

燕尾服の彼は、降りてこない。

「あの人は、」まだ寝てるのではないだろうか。

「構いません、行きますよ。」

えっと思う間もなく、

やはり彼は私の先に行く。

人はそれほど多くないものの、自分の足並みでは彼を見失ってしま
いそうだ。

赤のバックパックでさえ、目立たないのはこの色使いの激しい建物
たちのせいなのか。

さまざまな人がいる。

この建物とおなじように。

人の間を抜けて、若干早足で彼を追う。

やっと追いついたと思った時にはもう入口だった。

ソフトクリームの形をした白い巨大な建物。

豪華なお屋敷のような白扉は、今はオープン状態だ。

これがチャンスといわんばかりに私は飛びはいった。

なかはそれはお屋敷というよりも

まさに「ショッピングモール」。
がっこう内は老若男女だけでなく、さまざまな色のひとでじった返
している。

見上げると、円状に階が続いている。
てっぺんには、アクセサリー大の天窓。
青い空がみえる。

「そつちだ。」
私は振り向いた。

男は扉の外にいた。
荷物だけをこちらにおいて。

「そこが、たぶん、お前の所属だ。では、また、」
とって、あつという間に立ち去っていく。
「え、あつ、あの！ありが、」

私は慌ててお礼を言おうとしたが、彼の姿はもう見えなかった。

彼がにやっと笑ったような気がしたのは気のせいだったのだろうか。

理事長室

再び周りを見渡す。

円形型の一階の入り口付近はまさにショッピングモール1Fという感じ。

インフォメーションセンターや換金場、コンビニ、出店、ゆうびんや、憩いのスペース。

しかしその先に、同じようなドアが1、2、3、4、5、、、10ある。

どれも焦げ茶のドアに金の取っ手のあるもので、小さなアンティークショップの入り口のような雰囲気だ。

私はそのうち、一番入り口に近いドアへと進んだ。深緑の立て札に金の文字で」と書かれている。

なぜそこへ進んだのかというと、あの男が示したドアであるから、というだけでなく、

一番気安く入れそうであったからだ。

他のドアの前には、体育会系だったり、吹奏楽系だったり、と、人が居て入りづらかった。

特に一番奥のドアには、

自分とはとても相容れそうにないゴージャスないでたちをした人々がたむろしていたからである、、、。

こんにちは。

「どうぞ、お入り。」

また老人の声がする。

「失礼します。」

私は入る。

白髪の男性が座っていた。

一瞬あつと思つたが、彼のきれいな微笑みを見て、夢に出てきた人ではないと悟つた。

さらに、この人は目力がある。と思つた。

、、、、すぐく観察力があるといったほうの意味だ。

そしてとてもジエントルマン的になかつこ良さ。

あごがすつと整つていて、きりつとしたまゆと眼だ。

とにかく入つたとたん、見られている、それとも見入ってしまったているようだ。

、、、、若干落ち着かない。

「久しぶりの転入生だ。会えてとても嬉しいよ。こんにちは。」

「こ、こんにちは、！」

「まずは君の新しい名を聞かせてくれないか。」

間髪をいれずに、男性は聞いた。
内心はつと、かつ、ほっとした。

思わず自分の本当の名を名乗りそうになっていたからだ。

「ここは」クラスなんだ。私がこのクラスの理事を担当させてもらっている。」

教師というより、相談員、事務員だと思ってくれたらいいと彼は言った。

「だからジョーと呼んでくれたら、嬉しいな。」

彼はひじをトンと机の上に寄せて、前のめりになって言った。

彼の笑顔は人の心をほっとさせる。

「ジョー、これから、よろしく、お願いします。」

しかし私はおぼろげに応えていた。

頭の中では名前を考えあぐねっていたからだ。

えっっつと、、、、

手にかすかに汗がにじむ。

「！、名前のリストがあると聞きました、私の名前がここで有効なのか確認しておきたいわ。」

私にしては久々に結構早く気転が回った、いい言い回しだと思った。

「うむ、そうだね。ここにある。みてごらん。」

しかし彼は、待ってました、といわんばかりにどんつと机の前に置いた。

私は内心ひいゝとかすかに叫んで、名前帳と書かれた分厚い本を重々しく開く。

そこには名前がびっしりと書かれてある。

辞書よりもちっさい字で、だ。

これだけあつたら、迷ってしまう。

うゝん、

「名前、決めてない」なんて今更言えないし、
と思った瞬間、一つの名前が眼に入った。

J A N N

これだ、

J^{ジエイ}+ (プラス) A N N (杏)

私の名だ。

「ジャンにするわ。」

目の前にいる彼は驚いていた。

「、、、

男性名、、、に近いが、構わないかい。」というわけだ。

私は目を丸くした。

が、恥ずかしがりもせず、

「はい。」と即答していた。

表情と心が合っていない。とは思った。

が、身体と底のころとは調和していた。

JANNという名がふさわしいと。

強くありたいとそう思ったから。

JANNという名をパソコン上に登録しているのをぼんやり眺め、彼の作業が終わるのを待っていた。

「さて、授業料等に関してなんだが、」

私はさっと青ざめた。

お金が、ない。

いや、あるが、たいした金額はない。

第一ここはどこ通貨を使っているのか。

私の通帳のたいしてない額はそれに換算すると、どれほどのものなのか。

そもそもここで暮らすのにお金はどれくらいいるのか。

まったく分からない。

お金がないから私は、、。

一気に不安が頭から放出する。

彼はその表情を見て取ったのか、再び笑顔で応えた。

「いや君の学費や生活費に関しては預かっているんだよ。大学卒業までに関しては十分な額だ。」

預かっている？ いったい誰から。。。

不審そうな顔を浮かべていたのだろう。彼はまた続けてくれた。

「君の国からだよ。」

不安ではなく、恐怖がぐりぐりと棍棒のよつに心臓をかきえぐる。

いやだ。

そんなお金。

、引き換えの、

おかね。

私は戸口の隣に無造作に大量のアルバイトの張り紙がされてあるのを見た。

「このうちどれかを紹介していただけませんか。」

私は勢いあまって机に乗り出す。

なんでもいい。

自分で稼ぐ。

「いや、、、これは、君の考えている類の仕事ではないよ。」

「そんなっ、、、」

「もう空きがないってことですか。」

彼は頭を掻きながら言った。

「いや、そうではなくて、、、」

今度は彼が考えあぐねている。

「そうだ！」

彼は子どものように、ぼんと手をたたいた。

「4ON1に登録すればいい。」

「フォーオンワン？」
私は繰り返した。

「月に一週間、ローリースケートで四人の鬼から逃げる遊び、つまり一種のゲームだな。」

「それが、どうしてお金と、」
「彼ら4人からその週逃げ切れれば、その月の学費が免除されるんだ。さらにレベルの高いやつらから逃げ切れることが出来れば、月10万円の賞金が付く。」

学費免除！+賞金10万！！！

しかし、
「、ローリースケートってやったことが、ないです。」
接客業のバイトならまだやったことがあるのだから、やっぱりバイトを、。。。

「JANN君は自転車乗れるかな。」
自転車？

「ええ、乗れます。だって私は自転車で、」
ストップ、と言葉をさえぎられた。

「ここでは自分の国のこと、自分の身分を明かすようなことは一切話してはいけない。誰にも、だよ。」
私がかあつと顔がほてった。。。

自分あまりにもこのSCHOOLについて理解していないことに
恥ずかしくなった。

それにしても、

つまり、

それでは、

誰にも、

理事長はこうつないだ。

「でもJANN君が、自転車にか・な・り使い慣れているのは、見
ていれば、分かるよ。」

にこつと返されたたぶんこの人には珍しそうな笑み。

そう、片道一時間かけて家と学校を往復していたのだから、
自転車だけは自信がある。

スポーツは、まったくだが。

「それと一緒にだよ。生活に密着しているものは自然と上手になる。」

「きつとローラースケートも君にとってそういうものになるよ。」

、、、、、。

「でも！」

「仮にうまく滑れるようになっても、逃げ切れなかったら、っ、っ、
という言葉さえぎって、彼はにこにここと4ON1の申込書だけを
手渡して、

次の説明を始める。

明日の初日の登校日のこと、他の必要提出書類のこと、寮のこと、もろもろをだ。
あつというまで、一向にそのことに関して質問をさせてくれる気配がなかった。

説明を聞き終えた私は仕方なく、戸口に向かい、礼を言つて頭を下げて出て行くとした。

ジヨーはそれをさつと制止して、そのドアの横にあるエスカレーターの作動スイッチボタンを押した。

「寮はこれに乗っていきなさい。こっちのほうが、早い。」

こっちのほうが、の後は別の言葉をいいたげだったが、まったく取り合つてはくれないだろうと半ば諦めぎみの私は、続けて礼を言つて、一段目に足を置く。

「寮J103号室。」

彼がそついうとエスカレーターの前のほうがグニャグニャとありとあらゆる方向へゆがむ。

ゆがみすぎて先は見えない。

どうやら私を直で寮へ運ぶらしい。

私の顔もゆがんだ。驚きと恐怖で。

私は振り返るのを忘れて、ただただ前を見て、呆然とするしかないのだった。

「これとこれを借りてくよ。」

ジヨーに一人の青年が話しかける。

青年はこの理事長室の書齋に隠れていた。

そしてふうつとため息をついた。

ジヨーは彼女を見送ったやさしい視線をそのままその青年に返して、
ん、と応じる。

「なんで4ON1のことなんか。」

彼はジヨーから視線を横に向けて、聞いた。

「あの子にこんなバイトをさせたかったのかい。」

理事長はドアの横に無残に張られたいかわしい募集用紙を忌々し
げに見つめた。

「ある意味どつちも一緒さ。いずれにせよ、彼女は傷つく。」

「クラスの子がくるような遊びじゃない。」

彼は床を見ながら、答えた。

「君までクラスのことを気にするのかい。」

彼は、そういうことではなくて、と応じる。

「、彼女はちゃんと後ろ盾があるから、すぐそれを使うだろう。」

使えばいい、という風に手を振りながら、じゃあ、また、と言って
青年は戸口から出て行ってしまった。

一人書齋で彼の背を見送りながら、ジヨーは言った。

「大丈夫。彼女は傷つかないよ。」

「君が、守るだろうからね。」

クラスJとクラスA

昨日のあの後の寮での出来事はイメージングだった。

人が乗っているというのに、特急で進み、急停車するエスカレーター。
！。

外光に合わせて回転する寮の部屋。
しゃべるテレビ。

同じく、物品を要求する戸棚の空洞。

まあ、電子レンジに「オムライス！」と叫んだら、本物が出来上がっていたのは、花丸！だったが。

あまりに今までの日常とかけ離れている。

未来が、アトムが、やってきたみたい。

いずれにせよ、初日なのに
目にクマがあるのは確かだ。

ベットだけはしゃべらなくてよかった。と思っておく。

私の指定されたクラスJは、何事も無く、始まった。

というか、
ほんとに何もなかった。

自己紹介も、

教えに来る先生が私を気にするわけでも、

クラスメイトが私を気にするわけでも。

誰もがクラスメイト全員を知らないのではないだろうか、、、。

それとも、

それほど、出入りが激しいということなのだろうか、、、。

でも、言語には不自由しない。

どうやら、みんな自分の国の言葉を話しているようだが、、、
空気を伝わって、

それぞれの耳には自国の言語に翻訳されている。

こここの空気自体がいわば、自動翻訳機。

、、、
やっぱりイメージング。

とりあえず、いろんな意味でぐったりしている私の机の横に一人の少年が駆け寄ってきた。

「やあ！こんにちは！転校生？名前なんて言うの？」

わあ、初めて声を掛けられた！

「ジャンっていいます。」

私は慌てて机から身を起して、答える。

「ヴェイコルです。」

と言ったヴェイコルの背は、私が見上げるほどとっても高く、髪はとってもオレンジ。

目もオレンジ、な気がする。

そしてくりっとした目がとってもかわいい。あ、やっぱり目は茶色かな？ハンサムだなあ、とじっと見ていたら、

「御覧の通り、オランジ国の出身です。よろしくね。」

わたしは一瞬固まった。

えっ

今、

「ヴェイコル、わざとなの。」

と別の方向から、女性の声がした。

振り返るとそこには金髪の長い髪の、女の子がいた。

「転校生に国名をいきなり言うなんて、」

ヴィコルはあつという顔をして、私とその子に両方に頭をぺこぺこ
と下げながら、「ごめんごめん
そっかーそうだね、びっくりするよね、と言って、訳をきかせた。

「こういつオレンジの髪はみんな、オレンジ人だよ。わかりやすい
でしょ。」

にじつ。

にじつて、

えっ、

オレンジ国の人って、

ここにそんなに居れるの。

「、、、、、、。」

その言い方もものすごく驚かせていると思っけど、、、、。」

はあ〜と再びためいきを付いている彼女を試してみる。

わたしはあつと息をのむ。

金髪の彼女は分厚い眼鏡をかけてはいるが、

たぶんとても美人なのではないかと思う。

この二人は、、、、

顔で選ばれたのだろうか、、、、、、。

「まあ、、、ああ！そうか。まあいいじゃん、サラ。次は教室はラビエートだぜー。」

いこーいこーといって無理やり私たち二人を引き連れていく。

顔かあと一人物思いにふけっている私と、

まあいいじゃん、じゃないでしょう。と半端あきれ顔のサラという彼女、二人を引きずって。

いけない。

「サラさん、よろしくね。私、ジャンっていいいます。」
名乗り遅れた。

彼女はちよつとだけ目を見開いた。

「ちよつと変わってるわね、あなたの名前。」
おくびもせずに彼女は言う。

、、、、

やっぱり男性名なんだね。

「、うん、ちよつと、ええ、そうかもね。よろしく、サラさん。」

彼女はちよつと考え込んでから、言った。

「人の名前にどうこう言うなんて失礼だったわ。ごめんなさい、ジ

ヤン。

私のことはサラで良いわ、よろしく。」

私はまたよろしくと小さく繰り返した。

性格あつさり、言葉さらり、目も顔立ちもきりりとした、超美人だ。私、おんなだけど、青い瞳にこっちが吸い込まれそうで、ときどきしてしまつたよ。

などとまた一人で色々ぶちぶち考えているうちに先程のアイスクリーム状の塔の何階かに出た。

「あ！」

どこかを指さしながら、ヴィコルが言う。

そこには巨大なスクリーンがあつた。

各学年ごとの行事や、クラスの教室、授業内容やら、あるいはスーパールの特売品やら、週末のイベント情報まで載っている。

電光掲示板のようだ。

「4ON1のメンバーがでてる！」

サラも手すりを乗り出して見ている。

「、、、珍しいわね、11Sのメンバーが、」

「男ばかり。」ヴィコルはひどくがっかりしているようだ。

サラは無視して続ける。「またずいぶんと、、、。AとBは最強だわ。」

「だろー、サラ。2年前とは、ずいぶん、違う。」

いきなり後ろから声が聞こえた。
私たち三人とも、同時に振り返った。

そこには4人組が立っていた。

「、、、カーヴィン」

ヴィコルはひどく低い声だった。

「なあ、ヴィコル、お前もまた入りたいたらう。」

「」
ヴィコルは返事をしない。

「なあ、ヴィコル、」

カーヴィンと呼ばれた男は真っ赤だ、髪が。多分染めているんじゃないかと思うぐらい。

「というか、

なんというか、

この四人。

信号機みたい。

赤と青と緑と黄色、。

いかついんだけど、と思いつながら私はおなかの中からぴくぴくつと震えているのをなんとか堪えた。

これはいけない。

なんとか二人分ぐらいに注視しよう。

という私の視線に気づいたのか、青いやつが私に声をかけてきた。

「へえ、、、新入り？かわいいじゃん。」

（そんなに近くではないが、）面と向かって言われると、！

慌ててサラの方を見ると、

「サラ、俺と結婚してよ。」

、ええっ！？

、、、

黄色いやつがサラに詰め寄っている。

サラは、
酷い形相で睨んでいる。

「、、、、んなのいいから、」目の前から青い声が漏れる。

「俺見てよ。」

「いつ、」

腕をグイッと引かれ、前に、！

「ジェイジー、」

また別の方向から声が聞こえる。

何とかすれすれのところで体をまっすぐに整えた。

今度は二人組の女が立っている。

「ジェイジー、次の授業に早く連れてって。」

淡いストレートの金髪美女が、上の階に立っている。

「はあい、ミシェル。」青い男は呼ばれた方向に首を捻って、手をひらりと振った。

「カーヴィン、」隣に立っていた、茶のロングパーマの美女もこちらを見下ろしている。

「はあい、ミランダ。」赤い男は答える。

あつと、気付いた。

この二人も、この四人も、

昨日中央のドアにたむろしていたゴージャスな服装の人たちだわ、
、。

「じゃあね、サラ。」

「じゃあね、ジャン。」

青い奴がぱっと手を離す。

えっ、、

なんで、知ってんだ、

あたしのなまえ。

4人とも立ち去っていく。

「じゃあな、ヴィコル。お前の指示がなくて、せいせいするぜ。」

ヴィコルは腕を組んで、サラは拳を握りしめている。

ドアから消えていくとヴィコルが声を切る。

「ああ、余計な時間を食った。」

ヴィコルが行こうと手で合図する。

ヴィコルの行く方向へ走る。

ねえ、あの人たちは、と聞く前に二人が交互に答え始めた。

「あいつらはくそクラスA。」

「クズよ。金に操られた馬鹿ども。」

「金で、この学校のルールも場所もイベントも乗っ取ってる、、
バイトもか。」

「私たちを最も馬鹿にしてるわ、クラスJをね。」

、、、最初から、私たちの話に聞き耳を立ててたんだわ、まじ××
××。」

だからなるほど、私の名前が分かったのか。

そしてこの言い方だと、クラスごとにあるのかもしれない、優先順位というものが。

「、、、あいつら4人は11SのAグループの4人だ。」

さあああと青ざめた。

あたしそいいうえば「4ON1」に登録しなかったけ???????

口をパクパクさせて何か言おうとしていたその時、サラが走りながら、私に耳打ちした。

「ヴェイコルは2年前、9年生の時、クラスAだったの。」

私は今度こそ、目を見開いた。

サラは優しい顔をして、私を見る。

「ヴェイコルは、そう、いいひとよ、あんなんだけど。」

「そして4ON1もAグループの主将だった、、、あの赤いのは、ああ言ったけど、ヴィコルのローラースケートの指示は完璧だね。良い部下がつけばね。」

うんとうなずくと同時に

私は決心した。

そつだ、ヴィコルに教えてもらおうと。

そつ、！あと、

「あとね、サラ。ききたいことが、」

そつだ、いろいろ聞かなくてはいけない事がある。

「いいわ。この授業が終わった後にね。」

いつの間にか、私たち3人はラビエートの理科教室に辿りついたのだった。

A・M・11:00

えっ!?!い、いま、

瞬間移動した!!

とても感動的な場面なのに、サラは

「だってラビエートだもの、」と。

「さらっと言っね」とわたし。

、、、、、、、、。

明らかに後ずさったサラを見て気づく。

あっ!

違っっ!、今のは

と説明する間もなく、先生らしき人が
はよ座れ〜と急かす。

ヴィコルは、というとすでに前から2番目の席に座っている。
オレンジ頭が3つ並んでいるのが見えた。

サラは出入り口付近に座った。私もそれに続く。

そついやこの前の授業もこんな感じで座ってたかも、、、。

「じゃあはじめるぞー。」

生物の授業が始まった。

Schoolの一角の屋上。

一人の男が階段を上がってローリースケート場に顔を出す。

「お帰り」

「おかえり」

「よお」

「、、、、」

「ああ、もう！なんか、い、え、よ、よ、！」

ぱしつと背の高い金髪の青年が、今しがた来た黒髪の肩をたたく。

「ねむい」

「そこはただいま、か、いてえでしょ」

「練習中？」

黒髪の青年は無視して聞く。

「ああ、だって俺が仕切るんだからな。」

「Jackが？」

「僕になるって言ったのに、」

隣で別の金髪の少年がぴょんぴょんとはねている。

「Chack、年齢が満たないだろ。」

「いや、身長だろ。」

キシャーっとはしゃぎはじめるJackとChack。

黒髪の青年はダークグレーの青年のほうへ振り返る。

「Oshui、、Jack、

自分でやるって言ったのか。」

穏やかな笑顔でOshuiと呼ばれた青年は答える。

「「自分もAでリーダーする」って言ったよ。、、Jackらしいよね。」

はは。

黒髪の青年は思わず苦笑いをする。

だが、確かにJackらしい、と思う。

「Cairo!」

Jackの声が響く。

「てめえ、鈍ってねえだろうな。」

「かもな。」

Jackがガチヨンという顔をする。

そしてムンクの叫びでいやいや〜それじゃ困るのよ〜カイロくん！と叫んでいる。

「いや、ありゃ歌ってるな。」

一人つぶやくCairoにOshuiが笑う。

「とりあえず、Jack、追っかける?」

まずい。

ダウンホールに入っ行って行こうとしている。

「さつき5時間借りるの見たんだよね。」
「はははつとOshuiが困り顔で笑う。」
「あほか、あいつは。」

ギャーツ

Chackの叫び声が聞こえる。

「210ドル払ってた。」

「テイラノサウルスも借りたな、あいつ。」

「行くう。」

やっぱり、いいな、うう。

そしてCairoは3人の後を追うのだった。

A・M・12:00

「じゃあ、今日はここまで。」

サラがドアから出て行く。

ヴィコルは、、、

3人組で前のドアから出て行ってしまった。

サラを追い掛ける。

「サラ!、、、えっ、!?!」

足を踏み外した。

呼んだとたん、食事街の階段に出ている。

「ああ、ごめん、ジャン。

、、、ラビエート苦手?」

サラはききながら軽く笑う。

「苦手ではないけれど。」「戸惑うって感じ?」「そ、そんな感じかも、、、」

「私もよ」

「え」

とてもそう見えなかったけど、、、。

「慣れるわよ、そのうち」「うん」

食事街に入るかと思ったが、そのままサラはクラスへへと歩いていく。

教室には何人かばらばらといるだけだった。

「ききたいことがあるのよね。」

私もサラに続いて、前の席に腰を下ろす。

「うん。」

「いいわ、なんでも聞いて。私で答えられる範囲なら。」

「うん、じゃあ、、、。」

「え、ええっーーーーっ!?!?!」

サラの声にこっちが驚く。

そんなにへんなときいたかしら。

というか、

4on1に応募したんだけど、

ということまでしかまだ言ってないのだが、。

いちお周りを見ておく。

幸い教室には誰もいなくなっていた。

、、、。

「サラ、？」

私は下からサラの顔をのぞきこむ。

「あなた、いえ、ジャン、聞くわ、。」

「あなた、ローラースケートの世界大会への経歴があるとか？」

「いや。」

「分かった。ジョー理事長に頼まれたのね。情報誌に掲載はしないから、せめて理事会に出す際の名前を貸してくれって。」

「んーいや、違うかな。」

「どう違うの。」

「ジョー理事長がバイトの代わりに、って紹介したの、授業料が免除になるからって。」

「がたん。」

サラがものすごいいきおいで椅子から立ち上がった。顔が髪に隠れて見えないが、、、。

ものすごく、怒っているようだ。

「、、、ジョーがそんな人とは思わなかったわ。」

「へ?」

「ジャン、お金に困っているのね?」

「ん、いや、その、サラ?」

「バイトもだめ、4ON1もだめよ。せめて奨学金制度を受けて、
いいのを知ってるの。」

「う、うん?」

「取り消し、間に合うわよね。いえ、昨日までだったかしら、、、。

ああ、もうとりあえず、いきましよう!」

「う、うん?????」

いや、でもJクラスだからその時点で選ばれる心配はないか、とか、

いやでも逆に目立つから危ないとか、

ああ、そういえば青髪やけにジャンに絡んでたわねとか、

ああでもあの金髪が出るわ、よね?とか、

いえ、決定権はきつとカーヴィンだからミランダとか?、

ああでもあのクソFもだめよ!とか、ひとりでぶつぶつ言っている。

とりあえず私は再びサラに手を引かれて、またどこかへ向かっているのだった。

4人の男が仰向けで倒れている。

「つ、つかれた〜。」

「ぼく、みずがのみたいよ〜。」

「ジャック、水。」

「えっ?!なんで俺?!俺がリーダーなのに?!」

「リーダー」

chackがごろんと寝返りを打つ。

「リーダー、」

Oshuiが笑顔を向ける。

「リーダー」

Cairoがにやりと笑う。

三人の視線が一斉にJackに集まる。

「ああ〜っもう!買ってくりゃあいんだろ!」

Jackは立ち上がって、光が差し込んでいる扉へ歩き出す。

「つとその前に。」

Jackが立ち止まる。

「今年度のエーン（ターゲット）、決めようぜ。」
「バサツと大きな青い紙を背中のポケットから取り出す。」

「選び放題だぜ。」

Jackは楽しそうにその紙を広げる。

「俺はCクラスのアマンダがいい。ああ、でも同じクラスのライナもいいよな。あとリー・スイもサマンダも。」

「Cクラスの美女はカーヴィンが狙ってるって聞いたよ。」
Chackが呆れ顔でJackに答える。

「大丈夫。ミランダが出てくるから。」
Jackがにやりと笑う。

ふたりがやいのやいのやり取りをしているのを遠めにききながら、
Oshuiは立っていた、
、のだが、はたと気づく。

Cairoが紙面を一瞬見たのを。

いつもは見向きもしないのに。

そしてCairoはいつもどおり、恐竜風船の残骸を拾い始めた。

、
、
、
、
。

OshuiはCairoに背を向けて、鏡のようなものを取り出し、
左目で覗き込む。

、
、
、
、
、
。

「ジャック、」

「ん？」

すでに言い争いと化していたJackとChackがOshuiの
ほうへ振り向く。

「俺、ジャンって子がいいな。」

「え？」

JackとChackの動きが止まる。

OshuiにはCairoは見えないが、ゴミを拾う音が聞こえないから、同じく固まっている。

Chackが口を開く。

「、、なんだよ、ジャック、オシュウイの意見が聞けないってのか？」

「いや、その、、。」

まるで別の人間を見るようにして、Oshuiを見る。

そしておもむろに紙面をみる。

そして

「あ。おんなのこだったんだ。」

とほっとためいきをつき、

「うん。オシュウイの目に狂いは無い。」

とにんまり。

「、、、、。」

Chackは呆れてものが言えないようだった。

「カイ口もいいよな？」

とJackはCairoは見る。

一斉にChackもOshuiもCairoへ視線を向ける。

Cairoは一瞬無表情だったが、Oshuiのほうを見て、顔を真っ赤にさせる。

Oshui、。。。

Oshuiはにこにこ顔で、腰の辺りで小さく手を振っている。左手に鏡を持って。

「ああ、ジャック!!」

「カイロ熱中症なんじゃない?!顔が赤いよ!」

Chackが叫ぶ。

「マジで?!すまん、カイロ!すぐ買ってくる!」

「早く買ってこい。」

わああすまんっ!と言ってJackが戸口から消えていく。

Cairoは再び二人に背を向けてゴミを拾い始める。

ああ、もうほんとはやくかかってこい。

口ん中がからからだ。

「えっ、っ、っ、」

引きずられていたジャンは声を上げる。

「ん？」

サラはジャンの視線の先を追う。

電光掲示板には、

11' s Bグループの1(エーン)決定、、、

そこには「クラス」JANNと光っているのだった。

「び、ビィ？」

サラがぽかんとしている。

「ンダンダ族しかとらないジャックが、あのジャックが！」

私は振り返る。

いつの間にか私たちの横にヴィコルが立っている。

「ちょっと、ヴィコル、いきなり現れないでくれる??？」

しかも、

何、その、

ンダンダ族って??？」サラが続けて、

そんな大きな声で叫ばないで、

耳痛い、と言っ。

アマンダ、サマнда、ミランダのこと。

ミランダは余計でしょ。

他人はそうは思っていないみたい。

ありえない。

いいじゃないか、君もさ、サランダ！

サラがヴィコルに殴りかかろうとする。

たぶん、

本気で、

かも

そんなにかわいくない人（まあ、わたしっただら顔を気にしているのかしら、）。

いや、この2人を前にこんなことを考えない人の方が稀なはず。

これ、ぜったい。）

に言われたくないし、

てか、

思われたくもないだろうけど。

「ヴィコル、顔、

すんごいオレンジ色よ。」

「!?!」

今度は私のほうがおどろいてしまう。

サラってほんと、

たくましい。

こんな代弁してくれる友達がそばにひとりいてくれるとありがたい。ほんとサラッと言っちゃう、。おっと、いけない!）

「でも、どーしてBはジャンを選んだのかしら。

だってターゲット（エーン）にしては技量が足りない、地位もない。

「でも自分も指摘されるひとりだということをお忘れなく、ワタシ（泣）。

「ただの新人いじめ。」

ヴィコルが答える。

「ちがうわよ、カイロとオシュウイがいるんだから。」

「じゃあ、からだが目的。」

カラダ？

ダカラ？

ありえん。

「ヴィコルっつ！！！！！！！」

おっと、ぼつとしてた。

このままじゃ本気でサラがヴィコルをひっぱたいてしまう。

これって校則違反じゃなかったけ。

たしか規定の後半のページの、、、。

ってヴィコルが

あぶなーい！

あわや惨事は引きとめたが、

サラの怒りは収まらない。

「んなことになったら、あたしがジャックをぶったおす、！」たのむからそんなかわいいかおで、すごいこといわないでーーー

って現実ってそんなもん??

か。

なんやかんやで、

もし、

万が一、

取り消しが効かない場合は、

ヴィコルが教えてくれることになった。

「月、火、水、金の放課後って少くない?」

「『とりけしがきかないなんてことはありえないでしょっ』って非難する割には、

しかも、
その、
リーダーのカイロは、
つまり、
、、、男しか興味がないんじゃないかっていうもっぱらの噂があっ
て、、。。」

「おとこだから?」

男???

お・と・こ・こーーーーーっ!!!

やばい、
まじで、

しかも
さつき、
『ダカラ』
かもって、、

ヤバーーーーっ!!!

「んなわけないでしょ。」サラがずばっと言う。
(そうだ、ずばっただよ!ずばっ!こっちの表現がただし、
『ズバ』っ!!!)

って

ダカラ、

おとこっーっーっつっ！！！！

「なににせよ、カイロに確かめればいいんじゃない？」

「その必要はないぜ、サラ。やあ！ジャン、はじめましてー！」「ジャック！」

二人が同時に発する。

わあ、

すげい、、、

壮観。

美男美女が
四人。

おっと、一人は美少年。

すんげーかわいい。

ユナイッテドアルースの広告にでてくる男の子みたいな。

もう一人は完璧な
金髪、青い瞳の青年。

まじバツチし。

ただちよつと、

軽そう。、
かなり？

て、

なんだこれ、

わたし場違いじゃね？

（ああー言葉遣いが、！！いけない！おとこにはならないわよ
！だから、おとこには！！
うあわああっ！！）

「ジャック。あなたもよく、突然現れる人よね。ジャンがびっくり
してるじゃない。」

ちよつとちがうけど、

そのとおり。

いろんな意味でびびってる。

そう、びっくりではなくて、

びびってる！

「あなたもって、誰も？」

「俺も、

だって、ジャック。」

ヴィコルが手を挙げる。

「キヤあつ！

ヴィコルとだなんてっ！！」、、、。

(じゃむい、

しらける、

じゃむい、、、

とちっちゃな美少年が言っている。。。(

、、、。。。

「ジャック、聞いてたんでしょ、

わけを聞かせてちょーだい！」

サラのイライラが増してる、、、。

「ねえ、なぜ君はエントリーしないんだい。そしたら、サランダ、

「

そっから聞いてたのっ!?!

っとサラが今度は

ジャックに殴りかかろうとしている、、。

その先はなにを言おうとしていたのか。

「、、、僕がまっさきに君をエーンにするよ、ヴェイバー。」

あ、ベイバーは余計??

アメリカ映画の見すぎだわ、

しかもめっさ古いの。って、

あらまあ、思い出した。たしか

規約のページは47Pだったわ、、

ってこんどはジャック(さん)が

あぶない!

ああ、よかった、

ヴィコルがとめてくれた。

、。

あんまりいろいろあっち(のせかい)に飛ばないようにして

最近を決めてたのに。

まずい、

あれ、

？

戻ってきてる???

「いでで、とにかく、いろいろとちがうぜ、サラ。」

「なにがちがうっていうのよ?!?」

「まず、リーダーはおれ。」

きゃーっつとさけんだのは、サラだけではない、
ヴィコルも同時だった。

ふたり同時にカイロは?!まだ間に合うわよ、カイロは、カイロは
?!とちっちゃい美少年に聞いている。「、、、その反応はひ
どくね。で、次に

別にジャンが男だからって選ばれたわけじゃない。それに最初に推
薦したのは、オシユウイさ。」

「オシユウイ?????」今度は二人同時に叫んだ。

「俺は顔で選んだ。」

ジャンならミランダとも張り合える。」

「ちよつと、！」

ジャンが「クラスって分かってるの?!」

、、。

あれ？

今、ジャックさん、

若干首より下

(注：腹より上)

みましたよね???

ね？

「え、、、。

ミランダはCだけど、ジャンは、、」

ざつっ、ライター！

ええ、そうですとも。

私はそれならクラスAかBに入るでしょう、ジャックさん。「何言
つてんのよ！ミランダはAでしょ！」

、、。

サラってこつという時だけ、

(いや、こづいこのだけ、)
ニブちゃんだったのね。

誰にでも欠点はあるって分かって

ウレシー。

「いや、俺は別にそういうの気にしねーし。」

ジャックさん、

いまさらりとサラの確認したわね。(あっ、

またやっちゃった。)

「あ・た・しは気にするの、よっ！……！！……！！」

サラ、……。。

まだ気づいてない。

ってここで気づいたら

ジャック

今度こそ、

危ないわね。

「まあAよりJがいいけどな。」

あぶなくていいか。

「当たり前よ！！」「じゃん、

げきちんです。

まじ、

そろそろ

察して?????

「サラ、

顔はちゅーよりじょーだし。大丈夫、なんとかなるって。」

はっ。

はって顔しても、

ヴィコル、

もうおそい。

あー。

これからここでやっていくんだわ、あたし。

APRIL月 お昼休み

ドリー（カフェ）にて

12日12:17 4F:ゴローラン

たいへん。

大変です。（！）

あたし、

恋してる???

そりゃあ、

ほぼ毎日お昼ごはん一緒に食べたり、

月、火、水、金の放課後時間を割いて教えてくれたり、（土曜は勉強も！）

しかもその際ふいに手をつながれたり（！！）、

しかもイケメンだったらっ！！！！

誰だって恋に落ちるでしょうよ。

でも、

誰にも気づかれていないみたい。

第一一番近くに居るサラから

「ジャン。ヴィコルのこと○○でしょ？」とか聞かれたことないし。
(書けない!書けないよ!!)

だからといって、私に対してズバツと言わない、
というわけでもない。

実際昨日も、
「ジャン、それ、いけてないわよ。」
とってその場でボタンをいきなり無理やりほかのと付け替えられ
たし。

(ぎゃーーーーっ!!!!
なんであの子薄着なの?って感じで美術の先生(初授業)には見ら
れてた気がするし、
サラはサラで、

『あたしこの授業好きじゃないの』って裁縫始めるし!!!
(、、、、、、、、)

もしかしてただ先生に反抗したかっただけ???

やーめーてー

あたしはおだやかにすごしたいだけなのに~~~~(泣)

もちろんガールズトークができないというわけでもない。

さっきだって

「ジャン、オシユウイはいい男よ、、、、

えっ?! 年下はタイプじゃない!?!?

何言ってるのっ?!?!?!?

、、、っ! えっ!?!?!

まだ写真さえ見てない??!?!

ちよっと、今度2 - Bにいくわよ!?!」

とか言ってたし、

アンジェリーナ、

(ヱィコルがつるんでるオレンジ国の子、で、めちゃくちゃかわいい、、、、

そして性格もいい、

そしてアンディーっていう、同じくオレンジ国の彼氏がいる。()
にも気づかれていないみたい。

ヴェィコルと一緒にいるからか、最近、よく声をかけてくれる。

てかヴェィコルよりもよく誘ってくれる。

『ジャン、今度一緒にパーティー行かない??』
とか。

でも

行かない。

サラからの受け売りじゃない、

と思う、

けど、(?!)

ほんと、

行けない。

だってこの前会場をちら見したら、

オールオレンジ。

今まで誘われたって他国の人は絶対行ってないはず、、、、、。

んでもって

肝心のローラースケートは、

「はい、ジャン、ホットドッグセット。」

びっくうううー！

「ヴェイコル！あ、ありがとう。」

ああ〜びっくりした！

「何、？まだ『ノート』ってやつ？使ってるの？」
「う、うん。」

この人はパソコンというやつを使う。
という、わけではない。
それよりもっと進んでる。

アイパッド、
ではなく、
『ノウホッド』を。

つまり、

脳ノウが保つ（ホールド）するパッド。

もっと詳しく言うぞ、

思ったことを全て、

（ほんとにすべて！！！！）

書きちゃうの！！！！！

んなの使えるかつつ！！！！って思ったけど、
、、、、、、、。

みんなほんと

普通ーに使うてる。

そこ消して、って思ったらすぐ消えるんだから問題ないって。

もっとコントロールできるようにしたら、

その場で、完全なる教科書、もとい、虎の巻を作成して、売り出す
ものさえいるんだ、って。

あんまりに頑なにアタシガ拒否するから、

『なに？ジャン、他人のホッド見ちゃったの？』ってアンジェリー
ナに言われた。

まさかつ！！

んなわけ

なかったら（泣）……！

そうなの……！

みちゃった！みちゃったのっ……！

この前音楽の時アンディーの右後ろ斜めに座ってて、

見えちゃったの！

「ロツジ先生のパッド今日ずれてんな。」

って。

ぎゃあああ——————っっ!!

覗いた、

(ちがう違うちがう、!!!)(
たまたま見ちゃったあたしがいけないんだけど!!

それにしても他人の心が見えちゃう(もとい、かもしれない)(!(
ノートなんて!!!!

たまったもんじゃない。

てか

他人の心なんて見ないに限る。

「で、ジャンあのさ、」

そんなにノート見て、

何？ヴィコル？

「恋してるとって本当？」

1 2 日 1 2 … 1 8 6 F … M F G カ F H

にて

「カイロ、こつちだぜ！、、、て
なあ、ホッド忘れた？」

「あ、あ。」

「で、『ノツシヤ』。」

「のっしや？」

「ノートにシャーペン。」

「略すな。」

「あいかわらず、きつつー。俺リーダーだぜ。」

「リーダー。」

「感情こもってねえ。」
「そういやこの前ジャンに会った。」

「ああ、そうか。」

「、、、、、、。」

「なんだよ、ジャック。
なんか言いたげな、」

「聞かないんだな？」

ノートに思ったこと、

そのままリトウン(written)してるなんて!!!!

あほう

『恋してるって書いてるあるけど、ジャン好きな人いるの?』

(今でも思うけど、よく好きな人を前にして冷静に対処できたわよね、私。

いるよ、って答えても誰っ?てなってまずいし、

いないよ、って答えるのも悲しいし、

っていうトークをMONMO(雑誌)で読んだ。

「ちがうよ、違う人のこと。」

(ここまではよかったんだよ、てかここまでは、、、。)

「ロツジが、、、」

(てか、ここっ!!!!ここ問題!!!!

て、えっ???)

なんで、あたし、

ロツジ?????!

ほかにもいたやん、リーとか!一般的な人がっ!!)

「えっ!!!!?ロツジが???)」

で、

今たいへんなことになってる。

『ロツジはうちのJクラスの生徒（！）の誰かと付き合ってる……！』
ことになってる……！

（しかも広まるのはやすぎ……！
だってこの話したの、昨日この時間だよ……！）

んなあほか……っつ……！！！！！！

ていうか

ほんと

ロツジ先生

ごめんなさい。

ああ~~~~っ！

ど~~~~っしょっ……！

いつとき音楽の授業は顔上げらんない（泣）。

とりあえず、ヴィコルが来る前に、

消ぞ、
ココ。

にて

1 2 日 1 2 ・ 3 8 6 F ・ M F G カ フ エ

「！、カイロツ！」

「カイロ、今日早いな！来んの。」

「いや、今しがた来たけど。」

ポシューッ、、、、

、、、、、、。

「カイロ、お前、ま
まさか

、
30分前からいんの?!」

「。」「

「!だって沸騰再始動したぜコーヒー!!」

「はいはいはい。」

「5分待つのが嫌なおまえが!」

「ひとりで!?!?」

「メジャーカフェで!?!」

「さんじゅっぶんもっ!?!?!?!?」

「あー、はいはいはいはい、はい。」

「しかも今日もノツシャだし!」

「そーだな。」

「ぜってー、なんかあっただろ???」

「別にない。」

「、、、お前が『別に』って言う時は怪しいって知ってるか???」

「じゃあ、『ない。』」

「てか、今日も機嫌悪いし。」

「、、

そうか？、
」

20分後 一階：泉の間にて

「分かん。

、、、、

さっぱりわからーんっ！！！

てか、『俺』じゃねえし！！

変なのは、

おまえのほうだろ！！！」

「、、、、、、、、

りーだー、

怖いからひとりじっつのやめてくんない？

「！おう！チャック！！いたのか。」

「いたよ、ずっと。

で、結論から言つと、ジャックも変だよ。ひとりじっつてるし。シヤーペン握ってるし。」

「変じゃねえよ！てかお前も『ノツシャ』じゃん。」

「はあああ、ジャック、何言ってるの。」

これ、『ノツシャ』じゃなくて、

『ノツド』だよ。」

「は？」

「『ノツド？』」

「まあ、ジャックは知らないだろうね、だってこれSASしかもら
つてないし。」

「~~~~だからなんだよ、『ノツド』って。」

「このシャープペン、遠くのが見えるんだよ。
で、拡大された画像がノートに写るの。」

「なんも見えねーじゃん。」

「当たり前だよ。握ってる本人にしか見えないもん。」

「ちよい借り。」

「なにすんだよ！かえせジャックっ！！」

「え？真っ暗じゃん。」

「だって13階見てたから！」

「あほか。あそこは何もねえよ。」

「だって何かあるかもしれないじゃん！てか返せー！！！」

あれ、
じゃあ、
カイロは

何を見てたんだ？

「ヴィコル、」

だめよ、わたし、

現実から逃げちゃ。

本人に聞かなきゃ。

「ん、なんだい、じゃん?？」

ヴィコルのこの反応からして、

「..っっっっっ」

「..っっっっっ」

ヴィコルって、。

「ヴィコル、あんたホント分かりやすいわよね。」

「ええ?!何っ?!?!?」

「つて、サラ!いきなり現れないでくれよ!」

「さっきからいたんですけど!!てかあんたに突発的出現に関して言われたくないわ。」

「、、、で、どう思う、ヴィコル???」

もう答えは分かっているけれど。

「ええ???」

「、、、」

あたしのことよ。」

「ジャン、、、ええーっとな、」

はあ。

「ジャン、そのね、。」

「もう、いい、わかった、ヴィコル。」

「ジャンよくやったわ。」

でも残念ね。

今のあなたじゃ、勝ち目はないみたいよ。」

「カイロただいま、2回目の沸騰中です。」

「それ、双眼鏡？ジャック？」

「ああ、チャック。そうさ、いいだろ？」

「なんでMILLIGHTER使わないの？」

「使えねーんだよ、」

「えつつ？」

それって

『できない』

「って意味???」

「、そーだよ」

「『ぼく』

でも

『できる』

のに??」

「ちみって

あどけないかおして、っつー!」

「あつ!それよりね!ジャック!」

「な、ん、だ、い???チャックくん??」

「ジャックってカイロのあれなの?」

「、、、、、、。

は?」

「なんか、

行動が

『嫉妬に狂った女の人』みたい。」

「おまえ、あどけない顔して
ほんと俺にっただてついてくるよなああ?????」

「てかおまえが???

おれにそのノツドを?

貸してくれれば??

カイロのと交換して??

こっそり何見てるかのぞけたのにいい??

まったくもって貸してくれないどこかのおちびさんのせいだ???

おれはこんな言い草をいわね、」

「だってカイロの個人情報だもの。」

「カイロだって他人のこじんじょーほーとやらをのぞいてるかもし
れないんだよおっつつつ!???」

「まあまあまあ! ジャック、落ち着いて!」

「!!!でも!!!オシユウイの目からしても変だろ?!カイロは?」

「え?、いや、そんなことは。」

「いや、
オシユウイが『否定だけ』ってのは怪しい。」

「、、、、ジャックってこいついつときだけ鼻っていつか、野生の感が誰よりも働くよね、

まるで、」

「お、ま、え、！」

「まあまあまあ、」

「でもオシユウイも変だよな、」

「え？」

「エーンを自ら選出するなんてさ。」

「ああ、そつだな。オシユウイの好みの子ってああいう子だったんだな！ー！」

「えつと、」

「ジャック。」

「「ぎゃあつっつっつっつ……か、か、か、カイロさんっ
つ……！！！！！！」」

、、、、、。

「なんだよ……?」

「いえ！別に！！ねえチャックさん……?」

「そっだよね……あはは、」

「「はは」

「「は、」

「ジャック、明日の顔合わせ、俺行くから。」

それは、「俺の役目だし？」

まあカイロさんがソレ（リーダーが俺という事実）を認めていらっ
しやらないということは重々承知いたしておりますが、

「（チャック）オシユウイが行きたいんじゃない？」

、、、、。

「、、、、実は、

みんなには内緒にしていたんだけど、

『エーンにあの子を選ぶよつ』に頼まれていたんだ。」

「「えつつ!!!!」「」

!

、、、

オシユウイ???

「だ、だ、誰になの?、オシユウイ?」

「ジョー理事長に。」

！

「だよ、カイト？」

「！」

「明日のやつも、
でしょ？
頼まれたんでしょ？
ジョーに。」

「ああ、」

「だから、」

「俺が行く。」

「ふう、、、、。
やっぱり元リーダーだよ、カイトは。
ジャックじゃたよりないもんね。」

僕も理事ちようだったらカイロに頼む。」

「お、ま、え」

ギョーギョーギョーギョー

「、えつと、」

「明日の11時から広場横ラブラ・ミッシェルの花屋だよ。」

「あゝ、」

「サンキュな、オシユウイ」

「どづいたしまして。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873i/>

School!

2011年10月6日08時54分発行